



大学図書館問題研究会 近畿4支部新春合同例会のご案内

公共図書館の運営と施設 — 田原市中央図書館を例に —

日 時：2009年2月1日（日）午後2時30分～4時30分（午後2時 受付開始）

講 師：森下 芳則 氏（愛知県田原市中央図書館長）

会 場：ドーンセンター（大阪府立女性総合センター）5階 特別会議室

〒540-0008 大阪市中央区大手前1丁目3番49号

最寄駅は、地下鉄・京阪の天満橋駅です。<http://www.dawncenter.or.jp/>

参加費：無料

（大学図書館問題研究会の会員でない方もご参加いただけます。

この機会にぜひ大学図書館問題研究会にご入会ください。）

【開催趣旨】

大学図書館では「ラーニング・コモンズ」が大きな話題となっています。図書館内で自由に会話のできるスペース、パソコン等の設備が充実している場所、学習に関するサポートが受けられる場所など、場としての図書館のあり方について考える契機となっています。施設の耐震改修等を機会に、このような場所を図書館に設置しようとする図書館もでてきているようです。

図書館の施設と利用者サービスのあり方を再確認する必要がありそうです。利用者にとって役に立つ図書館とは、どのような「場」なのか？ 「場としての図書館のあり方」を考えるためには、できるだけ多くの図書館を見学していくことも必要でしょう。

今年度の近畿4支部新春合同例会では、田原市図書館館長の森下芳則氏に図書館施設と利用者サービスとの関係についてご講演いただきます。利用者層、利用する資料、必要な設備など、公共図書館と大学図書館のサービス内容には異なる点もありますが、同じ図書館として共通する点もあります。公共図書館でおこなわれている利用者サービスとそれを支えている図書館施設・設備等の工夫などを事例を交えてご紹介いただくことにより、大学図書館のサービス内容と施設のあり方を考え直すための新しい見かた、視点、ヒントが得られるものと思います。

【目次】

新春合同例会の案内	…	1
第10回図書館総合展参加報告：全図書館関係者が参加できる一大祭典へ	…	2
第10回図書館総合展報告：総合展の舞台裏	…	5
大図研京都数珠つなぎ	…	7

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたはURLへお寄せください。

電子メール：dtkk@rg7.so-net.ne.jp（大学図書館問題研究会京都支部）

URL：<http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

大学図書館問題研究会 近畿4支部新春合同例会のご案内(つづき)

【参加申込み】

当日も受付をいたしますが、資料準備の都合がありますので、参加されます方は、なるべく1月22日(木)までに次の連絡先に(お名前・ご所属・懇親会参加有無)をご連絡くださいますよう、お願いいたします。

【連絡先・問合せ先】

大阪支部事務局(担当:村上) murak@kulib.kyoto-u.ac.jp
※連絡にはできるだけ電子メールをご利用ください。

【その他】

例会終了後、懇親会を予定しています。
(懇親会に参加を希望される方は、1月22日(木)までにご連絡ください)。

【参考サイト】

- ・田原市図書館
<http://www.city.tahara.aichi.jp/section/library/>
- ・和設計事務所—作品紹介—田原町図書館及び生涯学習施設
<http://www.a-yamato.co.jp/tahara.html>

第10回図書館総合展参加報告：全図書館関係者が参加できる一大祭典へ

佐藤 翔

1. はじめに

今年で第10回を迎える図書館総合展が2008年11月26日から28日の3日間にかけて、パシフィコ横浜にて開催された。ちょうど大学の秋休みと重なったこともあり、筆者は泊りがけで3日間フルに滞在し、5つのフォーラムに参加した。これら個々のフォーラムの参加報告については筆者のブログ等で公開しているので、そちらをご参照いただきたい。本稿ではブログでは取り上げていない展示ブースについての感想と、総合展全体についての感想を主に述べたいと思う。

2. 展示ブースについて

すでに総合展参加者のブログ等で語られていることも多いが²⁾、今年は会場の関係で展示ブースがパシフィコ横浜の展示ホールで開催されたのに対し、フォーラムは向かいの(やや距離が開く)会議場で開催され、ブースとフォーラムの会場が別の建物になってしまった。そこで気になったのが、フォーラム/ブース間の距離が空いてしまったために、ちょっとした空き時間にフォーラム参加者が展示ブースを見に行く、ということがしにくかったことである。特に雨天時は足が遠のき、3日間の期間中で筆者は2度、それぞれ30-40分程度しかブースに足を運ばなかった。図書館総合展運営委員会の報告³⁾によれば入場者数自体は昨年の23,090名から23,360名へと増えているはずであるが、ブース出展者の中からは「昼休みとフォーラム終了後の時間帯以外は他のブース出展者しか来ない」と言う声もあり、総合展参加者自体は増えてもブースを見に行く人や、ブースを見に行く頻度が

減っていた可能性はある。図書館総合「展」であり、展示ブースこそがメインであることを考えれば、フォーラム/ブースの位置関係については来年度以降の改善が望まれるところであるだろう。

そんなわけでブースをまわった回数は少なく、すべてのブースを見きれてもいないのだが、まわった範囲では展示ブースもなかなか楽しめるものであった。これもすでに他の参加者のブログ等で言及されているが、今年からの新たな取り組みとして行われたポスターセッションについては参加者の評判も高かった。また、ブース出展者との交流や情報交換を行うことで、例えば企業ブースで所属大学の次期システムについて思わぬ情報を得たり、新たな出会いがあったりということもあった。もちろんフォーラム会場でも同様の情報交換は行っているが、実物の機材や資料を見ながら話を聞けるブースは貴重な場である。図書館システムを研究している学生の中には毎年すべての参加企業・システムの資料をこの機に集めて回っているという人もいて、同時にこれだけの（前述の運営委員会の報告によれば今年の総出展者は151件）企業・機関・団体の情報が得られる機会は稀、というかほぼ図書館総合展だけであり、貴重な情報収集・情報交換の場となっていることが実感できた（それだけに展示ブースの振興についてはもっと考えていきたいところである）。

3. 全体的な感想

総合展全体を通じて、幾度となく参加者間で話題にのぼったのは「フォーラム数が増え過ぎではないか？」ということである。これも前述の運営委員会報告によれば今年のフォーラム数は3日間で89、全11会場を使って行われており、フォーラム数63、全9会場であった昨年に比べても大きく規模が拡大している（フォーラム数は約1.4倍）。フォーラム参加者数も昨年の7,783名に対し今年9,511名とやはり約1.2倍の規模に拡大しているものの、フォーラムの数に比べると参加者が同じだけ増えたとは言いがたい。特に同分野のフォーラム間の時間帯の調整等を行われていないため、例えば大学図書館関連であればDRFとSPARC-JapanやSpringerのフォーラムの開催時間が被る等、参加者に難しい選択を迫る場面が多々見られた。

この参加者の分散が単にどのフォーラムに参加するか頭を悩ませなければいけない、というだけの問題であるなら良いのだが、実際には質疑やディスカッションで「この論点については是非あの先生/図書館員の意見を聞きたい！」という場面で当該人物が同じ時間に別のフォーラムを運営していると言ったように、各フォーラムの盛り上がり直結する問題をはらんでいたように感じられた。

個々のフォーラムの密度が薄れることはイベント自体が拡大すればある意味当然のことではあるし、対応しようにも例えば開催期間をのばす等すれば今より参加しづらくなる人も増えるであろう（現状でも出張扱いにできるのは2日までなので3日目は有給で来ている、と言うような方もいらした。もちろん3日すべて有給と言う方もいたが）。また規模が拡大することはイベントが盛り上がっている証拠でもある。しかし一方で参加者の母集団の拡大とのバランスは考慮する必要があるだろう。フォーラムの数だけ増えて参加する母集団が変わらず、人が分散するのではイベント拡大の意味がない。フォーラム数を増やすのであれば如何に参加者の母集団、総合展に来場する層自体を拡大できるかが今後の課題であり、それが難しいのならばフォーラムの数ある程度抑える（似たような内容のフォーラムが多いようであれば共催等の形でまとめることを考える等）ことも考慮に入れる必要があるかも知れない。

4. まとめと今後への期待

展示ブースとイベント全体について色々と文句というか注文を書き連ねてきたが、以上は全て図書館総合展に対する期待の表れである。図書館情報学を学んでいる学生の感覚からすると、今や総合展は日本図書館界最大のイベントであり、その存在感は学会研究大会や全国図書館大会に大きく勝る（もちろんいずれもその目的を異にするので単純比較に意

味はないが、あえて比較するならの話である)。北は北海道から南は沖縄まで、さらには海外からも参加者があり、大学・公共・専門・学校、その他の館種の図書館や類縁機関、企業やNPO関係者、そして自分を含めた学生や普段は図書館にそこまで興味のないような(一部のフォーラムや特別展を目的とする)人達までが同じ場を共有する稀有な3日間が図書館総合展なのである。

この貴重な場を今後どう維持・発展させることが出来るかは館種や立場を問わず図書館関係者全体に関わりうる課題である。今回は学術情報オープンサミットとの同時開催という形がとられたが、関連しうる他のイベント(例えばサイエンス・アゴラ等)と同様のコラボレーション等の検討によって参加者の層をより拡大することや、(参加企業等との調整を考えると難しい部分もあるだろうが)なんらかの形で関東圏以外の図書館関係者が参加しやすい/参加する機会を持てるような配慮をすることが考えられる。

これは全くの私見であるが、もし日本でALA年次大会レベルの図書館界の一大祭典を実現できるとしたら図書館総合展を拡大・発展させていくのが最も手っ取り早く実現可能性のある方法だろう。これを実現するには地域を問わず総合展に参加しやすくしたり、参加出来なかった人にも雰囲気や情報を伝えるための試みが重要であり、特に後者については総合展運営サイドに期待するだけでなくブログや他のwebサービスを通じての情報発信など参加者自身の手によってもなんらかの貢献が出来るのではないかと考えている。実際、すでに多くの方が総合展に関する参加報告をwebにアップされており、Twitter等のwebサービスを通じてリアルタイムにフォーラムの状況を共有しようと試みる参加者も複数いた。今回自分はこのような形で参加報告を書かせていただいたわけだが、いずれあらためて報告を書かなくとも誰もがそこで何が起こったかをだいたい知っているような—そしてそれでもなお出来れば会場に行き実際に場を共有したいと思えるような図書館総合展になることを期待し、その実現に微力ながらも貢献できればと考えている。

・注・参考文献

- 1) *min2-fly*. “学術コンテンツサービスの成長点：新たなニーズへの挑戦(図書館総合展1/10未満レビュー?)”。かたつむりは電子図書館の夢をみるか。
<http://d.hatena.ne.jp/min2-fly/20081126/1227714798>, (2008-12-10入手)。から始まる一連の総合展レビューおよび佐藤翔.“第2回ARGカフェ参加体験記”。ACADEMIC RESOURCE GUIDE. 2008, no.351,
<http://archive.mag2.com/0000005669/20081201023616000.html>, (2008-12-10入手)。等を参照。
- 2) 岡本真.“図書館総合展を顧みる”。ACADEMIC RESOURCE GUIDE(ARG)-ブログ版。
<http://d.hatena.ne.jp/arg/20081201/1228060066>, (2008-12-10入手)。
- 3) 株式会社カルチャー・ジャパン.“第10回図書館総合展 報告書”。株式会社カルチャー・ジャパン。http://www.j-c-c.co.jp/li_report/index.html, (2008-12-10入手)。
- 4) MIZUKI.“図書館総合展レポート(展示編)”。日々記：へっばこライブラリアンの日常。<http://hibiki.cocolog-nifty.com/blogger/2008/12/post-f59c.html>, (2008-12-10入手)。
- 5) 岡本真.“ARGカフェと図書館総合展関係の記事(1)”。ACADEMIC RESOURCE GUIDE(ARG)-ブログ版。<http://d.hatena.ne.jp/arg/20081201/1228060651>, (2008-12-10入手)。および岡本真.“ARGカフェと図書館総合展関係の記事(2)”。ACADEMIC RESOURCE GUIDE(ARG)-ブログ版。<http://d.hatena.ne.jp/arg/20081207/1228649197>, (2008-12-10入手)。等にまとめられている。

さとう しょう / min2-fly
(筑波大学大学院博士前期課程図書館情報メディア研究科/
ブログ「かたつむりは電子図書館の夢をみるか」)

※ 著者の希望により非公開になっております。

※ 著者の希望により非公開になっております。

大図研京都数珠つなぎ 三国志裴注に見る引用

長坂 和茂

挨拶文以外では初めまして。今年度から支部委員になった、長坂と申します。

先日、著作権の本を読んでいると、引用のためには出典を明記することが必要であるという記述に目がつけました。そのとき突然、三国志の裴松之注の書き方、を思い出しました。

あ、言いそびれましたが、私は比喻でも何でもなく三度の飯より三国志が好きな人間です。

といっても、まず正史三国志を読んだことのある人の方が少ないと思いますので、簡単に説明します。三国志とは2世紀末から3世紀末までの間、中国大陸に三つの国が興り、滅びるまでを描いた歴史書です。この書の編者は陳寿（ちん じゅ）といい、三国の次の王朝である、晋の歴史官です。彼が書いた『三国志』は当時から評判が高く、ある人はこれを読んで自分の書きかけの歴史書を破り捨てたという話さえ残っています。しかし、この書には記述が大変簡潔であるという欠点があり、晋の次の王朝である宋（北宋南宋の宋ではなく、南北朝の劉宋）の時代に裴松之（はい しょうし）という人物が勅命を受けて注を付けます。注というのは、後世の人間が過去の文献に対して、説明を加えるものです。

裴松之の注の特徴は、陳寿が誤っている部分や語られなかった部分を、他の書物を引用して説明していることです。

そして、その際に「どの書物から引用したか」という点をほとんどの場合で明記しているのが特徴です。

やっと、本題に入ります。

このことは大きく分けて三つのメリットがあります。

1. その書物、及びその記述がどのような視点から書かれたのか、検証が容易
2. 記述の信憑性の判別が書物の信憑性を基準に判断できる
3. 既に散逸した書物の断片を読むことが出来る

1については、三国について書かれた書物には、魏の立場から書かれた書物、例えば「魏略」、呉の立場から書かれた書物、例えば「呉書」、蜀の立場から書かれた書物、例えば「華陽国志」など、色々な立場から書かれた書物があります。引用元がどの立場から書かれたかが分かれば、その記述がどの立場から描かれた物なのかも解り、事件の真相に最も近い記述を選ぶことが出来ます。

2は、裴松之は注の元とする書物を選ぶのに「信憑性」を考慮しなかったため、なかにはプロパガンダのような信憑性の低い書物も混ざっています。裴松之自身が「でたらめな書物」とするものも有るくらいです。

そして、3です。中国大陸というのはしばしば全土を覆う戦乱に巻き込まれます。三国時代自体がそうでしたし、南北朝、五胡十六国、五代十国など、例を挙げればきりがありません。そうした戦乱の結果、当時の書物はほとんどが失われ、三国志の注として引用された書物のうち現存するのは、先述した「華陽国志」などの一部でしかありません。しかし、三国志の注に引用された部分を通して、それらの断片を垣間見ることが出来ます。断片から分かることも沢山あります。たとえば、「呉志」は呉の韋曜の書いた「呉

書」を大いに参考にしたことが分かっています。韋曜の「呉書」は現存しませんが、注に引用された断片からこのことが分かったのです。

逆にもし、裴松之が書名を明記しなかったら、と考えると恐ろしいことになりそうです。なぜなら裴松之の注は、後々、明の時代に通俗小説「三国志演義」が書かれるにあたって、大いに参考とされた記述だからです。そして、現在「三国志」と言えばこの「三国志演義」の事を指すと言って、ほぼ間違いないと思います。

ということは、裴松之の注が無ければ、「演義」もなく、吉川英治の「三国志」も横山光輝の「三国志」もコーエーのゲーム「三国志」も先日公開された映画「レッドクリフ」も世に出ることは無かったはず、と思うのは私だけでしょうか。

そう考えると、引用元の書名を明記することは、著作権なんて概念を用いるまでもなく、とても重要なことなのかもしれないなあ、と思った瞬間でした。

さて、思考実験終了。読書再開、つと。

参考文献

陳寿[著] 裴松之注 今鷹真・井波律子・小南一郎訳『正史 三国志』1～8 (筑摩書房, 1993)

晋陳寿撰 宋裴松之注『三國志』一～五 第2版 (中華書局, 1982)

井波律子『『三国志』を読む』(岩波書店, 2004)

ながさか かずしげ (京都大学経済学研究科・経済学部図書室)

◇ 会費納入のお願い ◇

会員のみなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

大図研会費および京都支部会費の納入をお願いしているところですが、納入率は依然思わしくない状態にあります。既に2008年度(大図研会計年度2008.07-2009.06)に入っておりますので、2008年度の会費の納入をお願い致します。また、2007年度以前の会費をお納めいただいていない会員のみなさま、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願い致します。

会費は、¥7,000 (大図研会費：¥5,000+京都支部会費：¥2,000) です。

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員におことづけください。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904 大学図書館問題研究会京都支部

また、ご不明な点は大学図書館問題研究会京都支部 (dtkk@rg7.so-net.ne.jp)、または支部委員(組織・財政担当)の渡邊伸彦 (〒606-8317 京都市左京区吉田本町 京都大学附属図書館資料管理掛気付 渡邊宛 電話:075-753-2647) まで。